5 生　活　科

吉浦公子・川崎一朗

1　生活科でめざす自立とは

生活科の教育目標は，次のとおりである。

> 具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ，自立への基礎を養う。

この目標を受けて，子どもたちの「自立」を考えるとき，次の３つの側面からとらえることができよう。

(1)　生活上の自立　(2)　精神上の自立　(3)　学習上の自立

具体的には

①　学級や学校という集団や社会の一員として集団生活が出来る。

②　自分のことは自分ですることができる。

③　日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。

④　学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり，自分の意志を人に伝えたりすることができる。

⑤　人の話をきちんと聞くことができる。

ということに置き換えて考えたい。

2　本校生活科でめざす子どもの姿

自立という観点から，本校でめざす子ども像をあげてみる。

(1)　具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども

(2)　自分で見つけた問題について，自分なりに解決する方法を考えたり，試したりする子ども

(3)　自分で気づいたり感じたことを豊かに表現する子ども

(4)　自分なりの考えをもち，考えに基づいて，判断したり，決定したりすることのできる子ども

(5)　自分や友達のしたいこと（していること）をふりかえる子ども

(6)　生活科で活動したことを基に，自分の生活を自分で豊かにしたり，工夫しようとする子ども

これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。今後は，自立という観点に問題解決的な学習過程を加えることにより，(4)(6)に焦点をあてて実践研究を進めていきたい。

3　生活科における具体的な活動や体験のとらえ

生活科における具体的な活動や体験は，結果を得るための単なる方法や手段ではない。それは，学習の内容であり，方法であるとともに，目標でもある。単に良い結果だけを求めるだけではなく，結果に至る過程こそ重視されなければならない。学習材と対峙し，子どもたちが試行錯誤を重ねた過程の中にこそ，意味のある活動や体験が数多く見られる。活動や体験が豊かであればあるほど，

次への活動の意欲がわくであろうし，そのことが子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。一連の学習ステップの一例は，次のようなものが考えられる。

子どもの日常生活から意味ある活動や体験を取り出し，再現する。（学習材との出会い）

↓

生活科の学習活動の中で得たものを共有し次への活動へとつなげていく。（学習の共有の場）

↓

子どもたちが自分の生活を豊かにし，児童自身の意志で（自覚的に）工夫していく。（学習の連続）

左のような学習モデルで，学習を進める場合，「子どもが自ら考え判断し，自分なりの理論が組み立てられるようにする。」という視点を常に持ちたい。それは，問題解決的な学習を積み上げることで，子どもたちが学習スタイルに慣れ，「自立」にむかうことができるようになると考えるからである。

4　具体的な授業構想　―子どもの日常生活の中から取り出せる意味のある体験とは―

子どもたちの身の回りには，存在には気づいているが，用途などをはっきりとは把握していないものが多くある。その一つに，点数字がある。歩道などに敷かれている点字タイルを学習材として取り上げた場合，ある児童が活動すると考えられる例を考えてみる。

「なぜ，歩道にぶつぶつがあるのだろう。」　←学習材との出会い

↓

「郵便ポストや，公衆電話にも同じようなものがあるよ。」　←自分と社会との関わり

↓

「何だろう。」「誰が使うんだろう。」「どうやって使うのだろう。」　←多くの疑問を持ち調べたいことを決める

↓

「どうやって調べたらいいんだろう。」　←調べる方法を考える

↓

「おうちの人に聞いてみよう。」「図書館に行って調べてみよう。」

↓

「目の不自由な人たちのものなんだって。」　←調べた結果を共有する

↓

「どうやって読むんだろう。」　←新たな疑問を持つ

↓

「読み方を本で調べてみよう。」　←学習の発展と継続

↓

※この後も学習は継続していく。

5　生活の中・高学年への拡大についての考え方

低学年の生活科の学習を拡大していき，問題解決的な活動を中心にして，学習を組み立てることができれば，その可能性はあるのではないかと考える。ただ，生活科は低学年の発達特性から考えられたものである。中・高学年では，理論的な方向にも問題解決的な活動を発展させていくことも可能であろう。また，総合的な学習を創造していくとき，生活科の理念は生かされるものと考えられる。各教科の関連や融合を図りながら，実践をしていきたい。